

## ☆☆☆ 巻頭言 ☆☆☆

### 知性と感性

川桐信彦

現在、精神の頹落現象が濃厚なことは言うまでもありません。それは精神性そのものの欠落とともに様々の現象を精神的に捉えるということが希薄である事実を示しています。文化は何らかの意味で精神的所産として形成されます。思想・内実は形式によって表現されます。形式のない内実も、内実のない形式も無意味です。形式と内実は不可分なものです。そして、この形式こそが私たちの文化です。精神文化学とは、簡潔に言えば、精神を文化の面から捉え直し、新たな活力に満ちた精神性を創出する試みです。

今般、精神文化学会を創設したのは、抽象的概念に終始して机上の空論に墮することを避け、新しい時代の精神文化に関する諸問題を新しい視点から考察し、具体的な現実の諸問題を洞察しつつ、精神性の深化と創造性の向上に寄与したいと考えたからです。

30歳代の初めに、私は、『表現の美学』という著書の構成を練ってしました。今から約半世紀も前のことで、当時はあらゆる面で、日本の表現的世界は大変稚拙なものでした。この構想の中核となるのは、人間は表現する実存だ、ということです。政治的、身体的、言語的表現を、政治の現実や、文学、美術、音楽あるいは建築といった手法で、人は表現することに熱中してきました。つまり何かを表現することが生である、ということを経験的、あるいは無自覚に実施してきました。政治も、法律も、音楽や絵画も、教育や舞踊も、都市や俳句や短歌も、謂わば人間の表現行為です。内実を形式として提示する表現力の深化も重要です。

さて、『国家の品格』という本が一時ベストセラーになりました。多くの方が品格を失った日本の現状を嘆き、そのような状況を如何に変革するかという課題に大変関心が深いということを示しています。国家論もこの学会のテーマとなり得る重要な課題です。

ところでこの本を一読すると、敗戦という屈辱の中で日本人はその誇

るべき伝統さえ捨て去り、アメリカナイズされ、軽薄で、物質的で、精神性を失い、本当の意味での国家の品格まで失ってしまった。従って日本の伝統的な、しかも世界に誇り得る唯一の精神的バックボーンである武士道を復活させるべきだという主張なのです。日本の精神的核は結局武士道でしかないし、品格を形成する因子も武士道だというのが、その主張の背景にあります。

確かに日本人は敗戦後、明治以来の欧米に追いつき追い越せ一色を、特に経済面に集中させてきた。そして日本独自に保有され育ててきた文化的価値まで、自信喪失の中で打ち捨てた部分が多くあります。

この本が指摘するように、紫式部の文学や江戸時代の固有な文化は、数学を含めて世界に冠たるものに違いない。そのように、部分的には日本人のコンプレックスを和らげ、誇りを幾分でも取り戻すきっかけを作り出そうと、この本の著者は配慮しています。

だからと言って、武士道の復活のみで、日本が本当にその品格を打ち立て得るのか。現在の多くの若い世代の人びとが、そうした考えに同調できるのか。ましてその「国家の品格」を客観的に外側から感じ取るであろう諸外国の人々が、それで納得するのでしょうか、など様々の疑問や問題があふれ出て来ます。まして、そもそも品格とは何を指すのかが問われて来ます。

マスを対象に武士道を声高に宣伝したところで、国家の品格が芽生えるはずもない。むしろ国家の品格をより具体的に形成するのは、あらゆる場でリーダーシップを発揮する中堅の人材を育てる「大學の風格」でありましょう。品格を云々する時その対象となるのは、何よりも先ず政治と大學でありましょう。国家の品格を下支えする伝統文化は、既に建築、舞踊、歌舞伎、茶道、華道、衣装といった分野で、世界的な水準と特殊性を発揮しています。

最近、エリート教育の重要性がいまさらのように論じられていますが、大學の存在理由そのものがそこにあったということが、いつの間にか忘却されてしまったからです。どんな人間がその国家のリーダーであるかによって、国家の品格はある程度印象付けられます。

よく考えると、日本文化の特徴として「道」という言葉をつけた多様な文化が存在する。武士道ばかりではない。華道、書道、香道、剣道、柔道、茶道など多種多様です。そしてこれらの文化を「道」として把握する日本人の特質こそ検証すべきではないでしょうか。そこに日本独自の品格や風格が芽生えていると考えられるからです。

加えて私は国家の品格を言う前に、国家を形成するリーダー的存在を育成するはずの「大學」とは何かという設問こそ、現実の課題として考えなければならないと感じて独自のアプローチでこの筆をとりました。品格や風格を下支えする日本独自の文化については、既に膨大な発言と文献があります。むしろ、その特有な文化や伝統について確かな見識があるのかが問われなければならない。さらに大學とは何かという設問もまた、そうした日本独自の精神文化と並行して問われるべきでしょう。「伝統」という言葉自体、明治時代の一部の日本人が欧米に対抗する目的で作上げた新造語だそうで、対抗意識は良いとして、それがいじけた狭小なナショナリズムに転化される必要はないのです。品格や風格は、もっとおおらかな態度で論じられるべきでしょう。

『国家の品格』の中で、普通の国であるより「異常」な国であれというように書いてありました。異常な国とは何をさすのかがあまりはつきりしないのですが、恐らく独特なものを捨てずに、普通であるより異常であれという願望が書かれていたのに違いないのです。

小沢代議士が、日本は普通の国になるべきだ、と言ったことがあります。普通の国とは、彼にとって、先進国と同じように、きちんとした軍備を持つ国を指していたようです。独立国に相応しい力を持つとういうことらしいのです。

ところで、「異常」な国が強調されると、「万世一系の天皇」とか、「神国」とか、「神風」などに代表されるアジアで突出した神聖な国、そしてこの国の神聖さを護持する、という意識が強化されることになりかねません。また保守的政治家が考える普通の国として十分な軍備というのも、周辺諸国からすぐさまクレームがつく。第二次大戦のツケはいつまでたってもまといつく。しかし、これを仕方が無いとか、前の世代の責任だ

と言って、逃れる事もできない。国家の歴史的なものを含めて、その総体を担うのが、国民の責務だと言えましょう。しかし前の世代の人たちがやったことで、現在の我々が責任を取る必要は無い、といった考えも出て来ます。しかも、世界大戦前の日本に復帰したり、昔の状態にノスタルジアを感じてばかりではいけない。現在の状況に立ち向かい、それをどのように乗り越えるか、という創意とエネルギーこそ必要な時代に直面しています。現在、日本の大學は、この創意とエネルギーを創り出す使命に満ちている。当面する時代性と若さのエネルギーによって、そうした創意を導き出す丁寧な、人格的な議論の積み重ねが、大學においてこそ必要なのです。

国家の特質を形成、助長するには、過去から学び取ったもの、歴史的に啓示されたものを洞察し、未来の国家形成の道筋を見出すことが先ず必要でしょう。それを為しうる人材を生むのが、大學の風格である。単に「異常な」といえば歴史的に見ても、フランス、ロシア、イギリス、そしてドイツの何れも異常だと言えないことも無い。従って、「異常な国」などといわずに、文化的、精神的特質を持った国と言うべきでしょう。国家の品格を言う時、突出した国家的神聖さを潜在させた表現、他の国々を見下した優越性の強調では第二次大戦以前にさかのぼるだけに過ぎない。愛国心とか国家論になると他国に対する優越性の強調が目につきま。異常な国などとわざわざ口にしなくても、グローバルな視点から客観的に見て、日本という国は大変に異常な国なのです。すでに普通ではない。紫式部の時代も、戦国時代も、徳川幕府とそれに続く鎖国の時代も、明治維新と欧米文化の吸収時代も、第一次、第二次大戦における日本の役割も、そして戦後の経済的大躍進も、すべて普通ではない。おおいにその異常さを発揮してきた国なのです。その異常な特質を、過信したり、神聖視したりすることなく平常心で見つめなおし、そこに秘められたエネルギーと独創性、広い知恵を育み育てるのが、大學の風格であります。自国の特殊性を否定することなく、その良質な特性を更に伸ばさせるのが、大學の風格であります。

ついでながら女子大の存続についても一言触れておきたい。男女同権

意識の強いアメリカにも、ラドクリフという名門女子大が、依然としてその存在を誇示している。日本でも、東京女子大、お茶の水女子大、津田塾大、奈良女子大などは、女子教育の牙城として、その伝統を絶やさず、一層その特異性に磨きをかけて頂きたい。津田塾大を見学したある女子高校生が、大學の内外をつぶさに見て、こんなに良い雰囲気の大學生に是非入学したい、という感想をもらしていました。これまで積み重ねてきた良き伝統を、如何に継承発展させるか。伝統ある諸女子大は創造的思索をめぐらせて頂きたい。強く聡明な女子の存在は、日本の将来を左右しかねないからです。女子教育の独自性を打ち出すことも、共学意識ばかりが先行する中で必要ではないでしょうか。女子大のダンディズムこそ復活すべきでしょう。

ダンディズムといえは、それは必然的に個性的な風格を形成します。何歳かを過ぎたら、自分の顔に責任を持って、ということわざが有りましたが、現代人の中にいわゆる良い顔をした人が極端に少ないのも気になる事実です。それは精神性の欠如であり、ある意味で、これはダンディズムの欠如を、最も端的に示しています。誇りと真の自律性、つまりダンディズムの無いところには、良い、味のある顔も無い。

自分の顔に責任を持って、などと言われた時代は遠くへ過ぎ去り、いまは顔の良し悪しは、一部の若い女性以外は気にしないのでしょうか。

それにしても、余りにひどい表情や顔の羅列の中で、やはり立派な、余裕のある顔をつくるのは、大學ではないか、と思います。無論、大學のみが良い顔を生む場所ではない。この道一筋に生きた人、結果として精神性の高い人生を歩んだ人の顔も素晴らしい。知的、感性的訓練によって、更にまた精神的歴史によって、人の顔は作られるのではないのでしょうか。如何なる精神的道筋をたどったかが、表情に出てくるのであって、それはまた、その人の読書歴の質をも表しています。

少なくとも日本の、文化的、政治的、経済的リーダーの顔が、客觀的にも素晴らしい顔の持ち主であってほしい。勿論そうした「顔」は、知的刺激や、精神的深さの体験、そして上質な環境から生み出される。そうした「顔」を作り上げるには何が必要かを、大學は考えるべきでし

よう。

歌手の佐藤しのぶさんが、シューベルトの「アヴェ・マリア」を歌い終わった後、静かに目を閉じ、余韻に浸りながら「アーメン」と小さくつぶやいていた。この曲が示す清らかな宗教性と豊かさに感じ入って、心からそうつぶやいている様子でした。心から感謝し、喜びが心と精神に充満する思いこそ、真にロマン的音楽が作り出す宗教音楽だと思うのです。

古典派からロマン派への橋渡しをしたモーツァルトの「アヴェ・ヴェルム・コルプス」を聞くと、清秀で豊かな愛の感情に満たされる。このように卓越した音楽が伝える一種の宗教性は、抵抗し難い力で私達の心を、感情を捉えます。宗教性に対する幅広い感性もまた必要な知性の一つではないでしょうか。宗教性という言葉が嫌いな人には、究極的関心をもった精神性といっても良いのです。知性とは何かについて、百万言を費やしても、全ての人満足するはずも無い。ただ私としては、知性とはこう云うものではないか、という考えを伝えるだけです。どんな本を読むべきかについても、ある人は自分の疑問に答えるような本を選ぶと言うだろうし、手当たり次第に興味を引く本を読むという人もいるに違いない。自分の専門に関係した本を先ず読むと言う人もいるでしょう。私はこういう本を読みなさいといったガイダンス的なことは言いたくない。ただ、本は批判的に読みなさいということはできます。書いてある事の是非、内容の良し悪し、表現の妥当性などを判断しながら、批評しながら読むのが知的操作なのです。

先に、美意識を伴う知性という事を強調しましたが、日本的知性あるいは、日本の独自性はそこにあります。日本浪漫派というのは、ドイツやフランスのロマン主義のように、科学主義に対抗する哲学的、精神的態度と言うより、幾分感性的、情緒的なものです。だからと言って知的、理性的要素に欠けるとはいえない。むしろ感性的、情緒的知性を特質として鍛え上げるべきだと思います。宗教性にしたって、日本人は宗教性に欠けるなどと言ったりする。ある日本の哲学者は、西欧のように神をもたないから我々は無宗教だと言われる。我々も神を作ればよい、など

と驚くべき発言をしていました。そんな神を持ちだしたら、益々日本人は誤解される。キリスト教の神は、この天地を創造した唯一の神、そしてキリストによって啓示された神であって、人間が作り出した神など、欧米人が相手にするはずもない。

今日宗教性というものは、あくまで個人的な精神のあり方なので、日本人の美的知性にとって、集团的宗教性と言うのは、余りにも醜悪なのではないでしょうか。宗教性の本質がゆがめられたり、大衆化される事で、本来美しい宗教性が低俗味を佩びてくる。ドイツロマン派の宗教音楽の秀逸さに浸って、私達の宗教性もまた、形式的にも知的でありたい、洗練されたものでありたい。精神性や宗教性に対して大學は、単に学問的対象とするばかりでなく、大學の風格形成に必要且つ不可欠な要素と考えるべきでしょう。

元西武百貨店社長で作家でもある辻井喬はその著書『新祖国論』の中で、感性と思想は異質なものと日本の一部の知識人、特に文学者の中で考えられてきたが、感性に繋がっていない思想の言葉が説得力を持たないのは当然である、と言っています。私自身はかなり以前から、感性無き知性は不完全であり知性無き感性は醜悪である、と考えていたから、辻井氏のこの言葉にひどく共感しました。元来日本人は、短歌や俳句を愛し、人情に厚く、やさしい性格の持ち主とされる。つまり感性の点では、高い国民として評価される。このように、感性と知性のバランスこそまずは精神性向上の第一歩なのです。知性と共に良き感性を磨き上げるのが本学会の目的なのです。